リューン戦記

花屋敷はじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リューン戦記

【Ｎコード】
Ｎ２８４４Ｄ

【作者名】
花屋敷はじめ

【あらすじ】
アースガルド大陸の三大強国の一つ宗教国家ジーヴェル国に仕える貴族の公子リューンは若くして王となったエリオットの軍師となり他の列国と戦う。なんとか物事を穏便に進めたい清廉潔白な少年であるリューンと自意識過剰でわがままな野心家の王子エリオットとの二人三脚の行軍が今始まる。

序章

乱世に生まれし者の辿る道は人それぞれである。

農民は、国の為に戦う兵士達の兵糧として米や農作物を税として徴収され、自分達はわずかに残った米を市場で売り生計をたて貧しい生活を送る。

商人は、役人にうまく取り計らう調子のいい者であれば金さえあれば優遇されるが、良心を持った者は役人達に何かと疎んじられ理由を付けられては金を毟り取られたり、時には身に覚えのない罪をきせられて命まで取られる者もいる。

平民は、子供は近所の仲間と遊び、少年少女は勉学にあるいは親の仕事を手伝ったりし、大人は人それぞれ色々な職に付いて働き、貧しいながらも一日一日懸命に生きている。

兵士は、戦に明け暮れいつ自分が死ぬかと恐れながらも自らの出世と今日の食べ物の為に戦い、いつかは命を落とす。もちろん中には自国の繁栄の為に命を掛けている者もいるが、そのような義をもった人物も戦ではただの一兵に過ぎず、だれの目にも止まらずに死んでいく。

貴族は、何処かの王に仕え王に忠誠を誓い各地の領土を与えられその地を治める。いざ戦となれば王の下へと馳せ参じ、王の命に従って戦う。しかし、中には主君を裏切って領土を奪い自ら王となる野心家もいる。

王は、国を治め民を養い、他国からの侵略者と戦って自らの領地

の民を守る。野心のある者は自分の領土だけでは物足りなく思い、軍備を増強して他国へと攻め込む。そして富と栄誉の為に何千、何万という人間の命を奪う事さえする。

乱世で生きる人々の行き着く先には何が見えるのか？
それはその時代にその場所に生きた者にしか分らない。

ただ私はこう思う。

乱世に生きる人々の中で一番輝くモノは

『愛』

であると。

～リューン・シュバルトより～

第一話　偽りの王子

この物語の舞台となるアースガルド大陸では主に三つの強国とその他十数程度の小中の国家が混在し、互いにそれぞれの思惑を抱きながらも、なんとか均衡を保って共存していた。

最大の勢力を誇る北の国ギーエン。南の大国ゴズウッド。西の宗教国家ジーヴェル。

この三国が三者とも互いに睨みを効かせていたので、どこか一方が他方へ攻め込めば第三国がその攻め込んだ国へ攻め込む為、安易に兵を動かせない状況になっている。

しかしこの三国が動きの取れない状況である事が、このアースガルドを一応の太平の世と成している要因となっている。

だが、いつまでもこの危うい均衡が続く程三国の王達は大人しくは無く、隙あらばいつでも攻め込み領土を侵略しようと腹の中で沸々と野望の炎を燃やしているのだった。

ジーヴェルはジーヴ教という宗教によって統治されている国家である。

このジーヴ教はこのジーヴェルの現在の王であるジークムント・ハイルが考案、布教した宗教であり、ジーヴェルの国民は皆大抵この宗教の信者である。

ただ、中には当然のごとく宗教心など持ち得ない輩もいるわけであるが、教祖兼国王のジークムントはことさらその様な者達を罰したり教を押し付けたりはせず、寛容に一国民としての生活を保障している。そして信者達も布教活動は行うが、無理に入信させる事や入信しない事に嫌悪感を抱いたりはせず、このジーヴ教自体が寛容な宗教である事がこの事からも伺える。

さて、このジーヴェルの領地で最大の規模の都市である王都ホーリーウォールにて物語は始まる。

春―若草、木の芽が芽吹くこの時期を嫌う者は少ない。寒い冬が終わり、ぽかぽかと暖かい陽射しの中で、人も動物も何かワクワクとした心弾む季節が到来したのだと実感する。
ここジーヴェル国の王都ホーリーウォールは巨大な城と広大な城下町を有し、外壁は高く厚く強固な都市である。
このジーヴェル国の大地は肥沃で農作物が良く育つため、兵士にしろ国民にしろ食料には事欠かない。
このホーリーウォールの城にも全兵士が摂る一年分くらいの兵糧が常備されており、敵に包囲され篭城せざるを得ない時でも少なくとも一年は耐える事が出来るというわけだ。
その間に敵が諦めて退却するか、敵の兵糧が底をつくか、いや、その前にジーヴェルの他の都市からの援軍との協力で敵を打ち破るのが先であろう。
この王都を大陸で最大の軍事力を誇るギーエンとの国境線に比較的近い所に建造したのは、この王都を軍略の最前線司令部として位置させる狙いがあったからだった。

春の陽射しが木々の隙間から差し込んでくるこの昼間。
ジーヴェル国の王子エリオットは森の中を馬に乗って駆けていた。
手には一般的なサイズよりも小さい規格の弓を持っている。
この弓で何か森の動物を射止めようとしているらしく、エリオットはしきりに何かを追っている。
「リューン！そっちへ行ったぞ！今日くらいお前が仕留めてみろ！」
エリオットの言葉に、彼の最も信頼出来る部下であり幼い頃からの親友でもあるリューンが声を張る。
「王子！外しました！得物がそちらへと行きます！」
その言葉通り、彼らが追っている獣、大きな猪が木々の間からエリオットの駆ける道へとザザザッと姿を現した。
「デカイ！大物だ！今日はツイているぞ！」

エリオットは背に背負っている筒から矢を一本抜き取り、弓の弦につがえて、一杯に引いた。
弓矢がぎゅぎゅっと曲がった所でエリオットの腕がブルブルと震えだした。
「もうダメだ！」
そう言うなりエリオットは狙いの定まらない内に矢を放ってしまった。
当然の事であるが、その矢がすごいスピードで左右に蛇行しながら走る猪に命中できるわけもなく、ただ道の上に落ち、自分の馬が数秒でその上を通り過ぎる始末となった。
明らかに筋力不足である。このジーヴェルの王子エリオットは１５歳になって元服しても、小型サイズの弓さえ、ろくに引けない。
大体この王子は同年代の少年と比べても明らかに虚弱体型である。身長は１５８センチで体重は３５キロ。ほとんど2、３歳年下の女児並といっても過言ではないだろう。
そんなひ弱な王子だが、自己顕示欲は強く目立ちたがり屋であるため、今日の様に山に狩りに出かけ、自然の獣に戦いを挑む事も好きだった。そして自分が射止めた野生動物を城に持ち帰って鼻高々に自慢するのがいつもの習慣であった。しかし、ここには一つ根本的な誤まりがあった。
それは――。
ドゥっと、前方を走っていた猪が突然倒れた。
「おぉ！やったか！」
エリオットは倒れた猪の側まで馬を近づけ、馬から降りた。
倒れ、ピクピクと痙攣を起している猪には一本矢が刺さっていた。
その矢は猪の頭をものの見事に射抜いていた。
そして、その矢には青色に染められた矢羽がついている。この青の矢羽の矢はエリオットだけが使っている特別な矢だ。
エリオットは先程自分が放った矢がこのイノシシの頭を射たものだと思っている。

先の矢が地面に落ち、自分が馬でその上を駆けたのだが、馬の足が速かった事と注意がイノシシの方ばかりに行っていた為に、矢の様な小さく細い物体の上を通過しても、木の枝の様にしか見えなかったのだ。
「よぉし！やったぞ！射止めたぞぉ！」
エリオットは歓喜した。
「リューン！リューン！どこだ！やったぞ！オレが仕留めたぞ！」
「ええ、王子。ここにおります」
と、茂みを掻き分けて一人の若者が馬にまたがって現れた。手にはこちらもまた弓を持っている。ただこちらは標準サイズの弓である。
エリオットは金髪であるがこのリューンという少年は黒色の髪である。また、エリオットの眼はブルーであるがリューンは茶色である。身長は１６８センチ、体重は５５キロ。細い体つきであるが、鍛え込まれた肉体で余計な贅肉はほとんど無い。
彼の名はリューン・シュバルト。ジーヴェル国の名門貴族シュバルト家の公子である。年齢は１６歳。現在はエリオットの護衛兵として常に行動を供にする容姿美麗な若者だ。
「お見事です。エリオットさま」
「ハハハ！オレの腕前も大したもんだろう！これでオレの９連勝だな。リューン、お前もしっかりしないと後１勝でお前の方は大台の十連敗だぞ」
リューンはかしこまって、
「はい。次回こそは王子よりも先に射止める事が出来るよう、精進します」
「ハハ。まぁ、せいぜい腕を磨いておくんだな」
ここに誤まりがある。そもそもエリオットの矢は得物に当たっていない。
つまり他の何者かがこの猪を射たのである。
その人物は言うまでも無く、この場に居合わせエリオット以外の

人間であることから、リューンしかいない。そしてエリオットが勝誇っている前回までの『8連勝』も、実は全てリューンがエリオット専用の矢を密かに仕入れてきて、得物をさもエリオットが射止めたように仕向けていたのだった。

エリオットはプライドが高く、自意識過剰な性格である。

しかし、彼は王子であるという『生まれ』以外に人に誇れるものは何も無い。

体が小さい上に、勉強も出来ない。またそのわがままな性格故、彼を慕う人物もリューンと王妃である母親のセシリア、そして血の繋がった妹のエリスくらいである。人間としての根は悪くないのだが、どうしても自分本位に振舞って周りの人から煙たがられるのである。

そんな劣等感から彼を少しでも解放してやろうというリューンの友情が、この偽の狩りを彼が始めたきっかけなのであった。

実際、この狩りを始めて3ヶ月、エリオットは狩りの度に得物を携えて城に戻り、その腕前を皆に自慢する事で自尊心が満たされ、満足な毎日が送れるようになっていた。

もちろんリューンは、本当は自分が射止めている事を誰にも知らせてはいない。

エリオットはリューンに仕留めた猪の運搬を任せ、自分は意気揚揚と森の外で待つお供の兵達の下へと馬をゆっくり向わせた。

お供の兵達はリューンが牽く馬の背に括り付けている大きな猪を見るなり、『見事だ！』『こんな大きなイノシシは見たことが無い！さすがだ！』『エリオットさまの腕前は冴えるばかりだ！』と、本人を前に5、6人が口々に褒めちぎった。

エリオットは鼻高々で体を仰け反って馬から落ちそうになる程有頂天になった。

この森は城のすぐ東側にある小高い山の裾野にある。

故に城から出て1時間もかからずに猟場へと着くことが出来る。

エリオットの様な一国の要人が少数のお供だけで城を出る事が許さ

れているのは、狩りを行う場所が近く、城の者達もその場所を良く知っているからこそであった。
　城に戻ったエリオットは自分が仕留めたであろう、巨大イノシシを城の者達に見せびらかした。事実、そのイノシシはとても大きく、またそのイノシシの頭をエリオットの青い矢羽の矢が見事に急所を射ている事に、見に来た城の兵や侍女、そして料理人などは感嘆した。
　兵達は仲間の兵にエリオットの弓の腕を称える話をし、侍女は侍女連中で騒ぎ、料理人はこのイノシシで美味しいぼたん鍋でも作ろうと、仲間と一緒にエリオット王子の弓術に感心する。
　エリオットが城の皆に注目の的となっている時にリューンは城の外に隣設されている訓練場に来ていた。そこでリューンは弓の練習をしていた。
　リューンは弓に矢をつがえ、一杯に引く。そして放つ。矢はヒューと音を出しながら一直線に飛び約３０メートル先の的に当たった。見事に的のド真ん中である。
　パチパチと突然後方で拍手をする者がいた。
「お見事。さすがリューンさま」
　リューンが振り向くと一人の可憐な少女が立ってこちらを見ている。
　茶色かかった髪は肩口で切り揃われており、大きな瞳は鮮やかなエメラルド色。容姿は可愛く、後数年経てばかなりの美人になるであろう。身長も同年代の女性の中では高く１６３センチである。ここジーヴェル国の王女エリスである。年齢は１４歳で、もちろんエリオットの妹だ。
「エリスさま。この様な所に、何かご用事でもお有りですか？」
「ええ、多分リューンさまがここにいるだろうと思って…」
　リューンはキョトンとして、
「どうして私がここにいると？」
　この質問にエリスはクスッと笑い、

「だって貴方は狩りの後はいつもここで弓の稽古をしてるわ。皆知ってる事よ。いつも兄さまばかりが得物を捕らえてきて、リューンさまは狩りから帰った後、必死に弓の訓練をしてるって。これ有名な話よ」
リューンは少し苦々しく笑ってみせて、
「ええ、お恥ずかしい話ですが、狩りではエリオットさまにいつも負けてばかりで、帰ってきたら悔しくてこうして稽古に励んでいるのです。今度こそは私が！と思うのですがなかなか上手くはいきません」
とリューンは言ったが、これはウソである。
リューンは本当にエリオットが得物を射止め、負けた自分がこれだけ悔しがっているという『事実』を作る為にこうしているのである。
そして言うまでもなく自分の腕が良ければ良いほどエリオットの株も上がると見越しての事。もちろんこの稽古はただ単純に弓の練習にもなるためリューンにとっては一石二鳥という訳だ。エリオットのお供をして、得物を見つけて、エリオットの矢が放たれた一瞬を見逃さず、自分も矢を放って標的に命中させるためには、かなりの技量が必要となるからだ。
「でも、不思議ね。全く弓の練習をしない兄さまが、いつも弓の稽古をしてこんなに上手なリューンさまを負かすなんて…」
リューンは笑って、
「エリオットさまは本番に強いお方なのでしょう」
と、言葉短く、そう答えた。
「それは…リューンさまは、本番に弱いという事？」
真顔で訊いて来るエリスにリューンは困り、
「いえ、そういうわけでは…」
エリスはぐいっと顔をリューンに向けて突き出し、その真ん丸の瞳でリューンの顔を見て、
「じゃぁ、どういう訳、なのですか？」

「ハハ…。それは…。いえ…。その…」
と、リューンはしどろもどろになった。
エリスは笑い、
「困らせたみたいで、すみません。でもわたし、もしかしたら兄さまの捕って来るイノシシやシカなど、本当はリューンさまが射止めているのでは、と思ったりもしてたのです。そんな事があるはずないのですけどね」
リューンは（鋭いな。いや、誰でも疑う事ではあるが）と思い、エリスの子供ながらの洞察に感心した。いや、バレない為にエリオットの青い矢羽の矢を城下の鍛冶屋にエリオットの発注より多めに作らせて自分が幾つか抜き取っているのはこの為なのであるが…。
リューンは幼い頃からエリオットとエリスとは親交があった。リューンの父リカルドは現ジーヴェル領内の有力貴族であるシュバルト家の当主であり、ジークムントとは国王とその臣下という立場を越えた良き友人である。またジークムントの側近でもある。
父が国王の下へと出向く時などに良くついてきていたリューンは、子供の頃からエリオットやエリスと会う機会が多く、年齢も近い事から、良く三人で遊んでいた。初めて出会ったのはリューンがまだ9歳、エリオットは8歳、エリスは7歳の頃だった。
子供同士とはいえリューンは王子であるエリオット、そして王女であるエリスには決して失礼な態度はとらず、名前を呼ぶ時も必ず『さま』を付けて呼んでいた。
これは父であるリカルドから厳しくしつけを受けていた為である。
そしてリューンは15歳で元服すると、父リカルドの薦めもあってエリオット王子の守護兵としてここホーリーウォールの城で働く事となっていた。
それから1年。リューンは城の中もしくは城下町で働く内にエリオットが皆からどの様に思われているか知ってしまった。
つまり、エリオットはわがままで自分のしたい事しかやらない、剣術の練習や勉強をおろそかにしていつも遊んでばかりいる『道楽

王子』であると。
　しかしリューンはエリオットがそれだけの人物であるとは思っていなかった。
　確かにこの王子は皆が言う様にわがままでなまけ癖がある。しかし、その心の内には真面目さもあれば優しさもある事を長く近くで接してきたリューンは知っている。
　人伝の悪評だけでエリオットの人間性をあれこれ言われるのは、エリオットの良い所を分っているリューンにとって我慢ならないものなのであった。
　それにエリオットは剣術や武術の稽古はさぼってばかりであるが、運動神経は良く、また政治、兵法の勉強もやらないが頭の回転は速く、物覚えも良い。
　体が小さい為、戦場で武器を持って戦う事は難しいかもしれないが、軍の大将として後方から命令を出して状況に応じた戦略を立てて自軍を勝利に導く、という様な役回りなら、きちんと勉強さえすればかなりの戦果をあげる事が出来る人物にもなれるのでは、とリューンは時々思う事もあった程だ。それだけリューンはエリオットを買っている。
　リューンは本当くさく苦笑して見せて、
「ハハハ。もし私の白の矢羽の矢が得物に刺さっていたなら、私も大手を振って皆に自慢出来るのですが」
と、見事な演義でそう言った。苦々しく笑った仕草など、表彰ものである。
　エリスはなぜか複雑な表情を眼に宿して、リューンから視線を外し呟くように、
「良かった…。本当に兄さまが仕留めているみたい…」
　そのちょっと変わった仕草にリューンはキョトンとした。そんな事はお構いなしとエリスは続けて、
「では、わたしはこれで…。リューンさま、弓の稽古頑張って下さい。今度こそはリューンさまが得物を捕ってきて下さいね」

リューンは屈託なく笑い、
「ええ、有難うございます」
そう答えたリューンに一礼して、エリスはそそくさと訓練場を後にした。
リューンはエリスが去った事を確認してから、『事実』作りの為にまた弓の練習を再開した。
（エリスさまは疑っていたみたいだ。他にも疑ってる奴が何人もいる事だろう…。『コレ』も、もう潮時かな）
リューンは弓に矢をつがえて、フュッと矢を放った。
矢はドッと的の端に刺さった。何とか的を外さずに済んだという一矢だ。
リューンは雑念を払う様に首を左右にブルブルと振ってから天を見上げた。
空は青く澄んでいた。雲がゆっくりと流れ、日は西に傾いている。
リューンは深呼吸してから前方の的に視線を移し、弓に矢をつがえて、矢を放った。
その矢は今度は的を外し奥に設置してあるワラの壁に突き刺さった。
（潮時か…）
リューンは的やワラに刺さった矢を回収してから訓練場を後にした。
その日の夜7時を回った所。
エリオット王子は父であるジークムント国王と母セシリア王妃、そして妹のエリス王女と供に長テーブルについて食事を摂っていた。
テーブルの上にはエリオットが捕ってきたイノシシを使った様々な料理が並んでいる。
エリスは上品にイノシシの肉のステーキをナイフとフォークで上品に切り分け、口に運んだ。
「兄さま。すごく美味しいですわ」
エリスは正面に座るエリオットを見てにっこりと笑い、そう言っ

た。
「美味しい？そうか。それは捕った甲斐があった」
と、嬉しさを隠しながら答える。本当はもっと大声を張り上げて喜びたいのだが、彼が苦手な父ジークムントも同席している為、大人しめの表現に留めた。
「エリオット。本当に美味しいですよ」
と、母である王妃セシリアもそんな感想を口にした。
セシリアは基本的にエリオットに優しい母親である。
ただ夫であるジークムントはセシリアがエリオットに母親としての愛情を示す事を快く思っていない節があるみたいで、ジークムントが同席している場合は声を掛ける時もなるべく短く、簡素に言うように心掛けている。
「母さま。いつでも捕ってきますよ」
エリオットは控えめに笑った。こちらもジークムントがいる場合は口を控えるよう幼き日から学習して来ていた。
そんな三人とは違ってジークムントは不機嫌そうな顔で嫌々しくイノシシの肉を頬張り、ゴクッと飲み込んだ。
「わしの口には合わん。エリオットよ。弓の腕を挙げるのも良いが、まつりごとの勉強も疎かにしてはならんぞ。お前はいずれわしの後を継いでこの国の王になる者だ。若い内に頭を鍛えておかねばならんからな」
エリオットは畏まって椅子に座ったまま頭をコクッと下げ、
「はい。近頃はまつりごとにも興味が出て来ました。先生にも物覚えが良いと褒められています」
「そうか。それならば良い」
そう一言残してジークムントは部屋から出て行った。
残った三人はジークムントの姿が消え、足音が聞こえなくなると、皆「フー」と安堵の溜息をついた。
エリスは少し怒った口調で、
「兄さま。また嘘をついて。まつりごとの授業はいつもさぼってい

るのでしょう？」
エリオットは「あっはっは」と高笑いをして、
「いいんだよ。どうせ誰も父さまに告げ口などする者はいないのだから。そうでしょ？母さま」
セシリアは少し呆れたような顔を見せて、
「エリオット…。貴方の事を庇っていくのもそろそろ限界よ。お願いだからちゃんと勉学に励んでくれないと…」
話のようにエリオットが家庭教師の授業をさぼっている事を王の耳に届かないように取り計らっているのは王妃であるセシリアである。
セシリアは昔からずっとエリオットの事を他の誰よりも擁護して来ていた。
それはなぜなのか？
体を小さく生んでしまった母親としての申し訳無さなのか？
それともエリオットの事をジークムントが好ましく思っていないからか？
そう――ジークムントはエリオットの事を余り良くは思っていない。
それはエリオットの貧弱な体質もその理由の一つであろうが、最大の理由は、エリオットの顔が自分とは全く似ても似付かない様相をしているからである。
この事は城の者達の間でも密かに噂になっており、エリオット王子はジークムント王の実子ではないのでは？と言われている。
まだ憶測の域を出ない話であるが、ジークムントがエリオットを余り可愛がらない理由はそんな所にあるのではないのかとそう考えるとつじつまが合う。
「エリオット。明日からはちゃんとまつりごとの授業にも出てね。頼みますよ」
王妃は顔を曇らせて、半ば懇願するかのように言った。
「まぁまぁ。母さま。そんなに心配しないで。明日からはちゃんと

勉強もするし、剣術の稽古もしますよ。約束します」
と、エリオットは晴れやかな表情でそう言ったが、セシリアとエリスはこの息子と兄の約束程薄っぺらいモノは他にない事を知っている。
「ああ、眩暈がして来たわ…」
と、手で頭を抱える王妃。
「母さま。しっかり」
エリスはセシリアに声をかけて、エリオットを見た。
「兄さま。どうか勉強を！」
「分った、分った！ほんとやるから。今回は！」
エリオットは少しバツが悪そうになりながら残りの料理に手をつけた。
城に住む上役連中はその日の夕食にぼたん鍋を食べた。
油が乗っていて濃厚な味わいであったと、食べた者は皆満足したという。
エリオットは翌日にその話を聞いて嬉しくなり、
「良し！明日にでもまたいくか！」
と、張り切っているという。
そんな彼の様子を人づてに聞いてリューンは心苦しくなっていた。
自分の好意で始めたウソであったが、これは本当にエリオットの為になっているのだろうか。
この狩りを始めるまでの3ヶ月前まではエリオットはただのわがまま王子というレッテルを張られていただけの少年だった。しかしリューンの計らいでエリオットは一躍注目の的になった。狩りに行く度に城の役人や衛兵達に得物を捕らえてくるのを期待され、実際にエリオットは自分の矢で射止めている得物を見て本当に嬉しそうに笑う。
いつも誰かをひがんでいた数ヶ月前の王子はもういない。彼の周りにも徐々に人が集まるようになってきていた。人の上に立つ人物は、やはり人望が何より大切である。特に一国の王ともなれば色々

なタイプの人間と交わってその都度状況に応じた接し方が出来る様にならねばならない。リューンは狩りを通してエリオットが人と交わって、リーダーシップを取って積極的に人間関係を構築して行ってくれれば良いと考えていた。

しかし、もし狩りの得物を本当は自分が仕留めているという事が他人に知られたら、エリオットの面子は丸つぶれである。そして騙され続けていたエリオットは自分を憎んで決して許さないかも知れない。

（オレが浅はかだったか…）

リューンは自分の若さ故のこの短絡的行動を悔やんだ。

（しかし、止めるにやめられないではないか！）

リューンは仕方がなくこの偽りの狩りをもう少し続ける事にし、頃合を見計らってから、エリオットにだけ真実を打ち明けようと思った。

第一話　偽りの王子（後書き）

はじめまして。花屋敷といいます。この物語を読んで下さって有難う御座います。さて、この後書きの欄でこの物語の登場人物を紹介させて頂きたいと思います。まず、栄えある初回は当然主人公のリューンです。リューン・シュバルト―１６歳。男。この物語の主人公。ジーヴェルの名門貴族シュバルト家の公子。容姿端麗。身長１６８センチ。体重５５キロ。サラサラのストレートヘア。深い黒の髪。眼は茶色。厳格な父を尊敬し、常に正しいと思う道に進もうとする。真面目で優しい反面頑固で融通が利かない事も。痩せているが筋力は戦闘を行うのに十分で、剣術も得意。動きがすばしっこく瞬発力、動体視力、反射神経、体全体のバネは申し分ない。持久力、集中力も一級品。ただ体重がないため力比べの展開になると不利。戦場では長剣を持ち徒歩での一撃離脱の戦法を取る。

第二話　リューンとエリオット

狩りの翌日――昨日セシリアとエリスに宣言した手前、エリオットは午前中から家庭教師の授業を渋々受けていた。

エリオットが今いる場所は城の中の一室で、エリオットが勉強をする時に使う部屋であり、今この室内にはエリオットと彼の家庭教師であるフランチェスカと、守護兵であるリューンの三人がいる。

フランチェスカは政治や経済に詳しくエリオットにそれらを教えている。

年齢は29歳で肩口まである髪は巻き毛で、色は赤茶。眼鏡を掛けており、小顔で色白。整った顔は美しく、知性豊かな彼女の内面が伺える。才気溢れる女性だ。

「市場経済とは企業や個人が自己利益を最優先して物財を生産し、市場において分配する形態の経済である。規範や指令もなく、市場における消費の動向によって生産活動が規定される特徴が――」

フランチェスカ女史の麗らかな声が春の陽光に溶け込んで部屋の中に穏やかな雰囲気を作り出していた。

「ふぁ…」

エリオットは昨夜遅くまで起きていた為睡魔に襲われていた。いや、例え十分な睡眠を摂っていたとしても彼の場合は授業中はいつも眠くなってしまうのだが。

「エリオットさま？聞いていますか？」

フランチェスカが机に就いて教科書を開いているエリオットの顔を覗き込んでそう聞いた。

「ああ、聞いてる！聞いてるよ！」

エリオットは焦り気味に答える。

フランチェスカはなぜか目を輝かせて、目線を上げて手を胸の辺りで組んで、

「ああ、エリオット様が三ヶ月ぶりに私の授業をお受けしてくれる

なんて！しかもいつもなら１０分もしない内にどこかへと逃げてしまうのに、今日はもう１時間も！ああ、私、教師になって良かったわぁ！」
と、大げさに喜んだ。
エリオットは「ハハ」と苦笑した。
（眠い…。それにフランチェスカが言ってる事もこの教科書に書いてある事もさっぱり分らん）
しかし――昨日約束した為たった一日の、それも初っ端の授業を抜け出すわけにはいかない。
エリオットはとりあえず教科書を睨みつけて、さも真面目に勉強しているふりだけでもしようと考えた。
それから３０分。エリオットは何とか９０分間耐え抜き授業を終えた。
内容は全く分らなかったが、彼はただ授業に出た、勉強をしているという事実さえあれば良いので、少しの後ろめたさも無い。
本当は勉強というものは自分が知らない、分らない事を必死に覚え考え、時折先生に質問して理解し、自分の知識として吸収し、それを実生活に役立てて行くものである。
その点でもエリオットは王子であり将来の王であるという自分の立ち場を考えない、余りにも幼稚で身勝手な行動を取っている。
「リューン。飯食いに行くか？」
フランチェスカが部屋を出て行った後、部屋の隅で待機し、自分の身を守る為いつも行動を供にしている守護兵のリューンにそう声を掛けた。
リューンは少しムスッとしており、それに気づいたエリオットが、
「どうした？」
と訊いた。
するとリューンはその表情のまま、
「王子。今日は頑張りましたね。授業の内容は身につきましたか？」
エリオットはいつもの調子で、

「ああ、簡単。簡単」
と、笑う。
リューンは分っているが、
「王子。今日の授業でやっていた市場経済の対立概念は何でした？」
「ン！？」
リューンの突然の質問にエリオットは一瞬体が固まる。
そして、あたふたし、
「オレは分かっているぞ！？お前、そんな事を聞いてどうする！？」
リューンはエリオットの目を見据えたまま、
「いえ、私も王子の守護兵でありますから、このくらいは知っておかないと後々まずい事になるやもしれません。いざという時、王子の力になれなければ私がいつも側で仕える意味が無いですから」
「そ、そうか！？そうだな！？ンー！？何だったかなぁ！？ハテ？簡単過ぎてド忘れしてしまった！？んんー！？何だったか、な～！？」
リューンは目を細め、
「たしか…自由経済でしたか？私も良く覚えていませんけど」
エリオットはパッと顔を明るくさせて、
「そう！そうそう！自由経済！そうだよ！オレもちょっと出てこなくて！あはは！そうそう！自由経済だ！」
「さすが王子」
エリオットの仕草が可笑しかったか。リューンはクスリと笑った。
本当は計画経済である。
それでもリューンはエリオットが抜け出さずに９０分もの間我慢した事に一様の納得を得ていた。
これを期にエリオットがとりあえずは授業に出て、その内内容を理解するようになって、その上勉学を苦と思わぬようになれば、こんな良い事はないと楽観的ではあるが、そう思った。
エリオットとリューンは供に城の食堂に出向いた。
エリオットは夕食は家族と摂るが、昼食はいつもリューンと一緒

に食べる。ちなみに夜型人間のエリオットは朝食は摂らない。
食堂は広く、一度に５００人は席につける。故に城で働く者達は何時来てもテーブルについて食事を摂る事が出来る。それはお昼時でも同様である。
　食堂にエリオットが姿を見せると、皆顔を向けて、
「エリオットさま。いらっしゃい！」「エリオットさま。昨日また得物を仕留めたらしいですね」「どうしたら弓が上達するのですか？」
　などと皆大声で声を掛けてくる。すごい人気である。これは三ヶ月前とは明らかに違う反応である。
　三ヶ月前ではエリオットが来ると皆目を伏せて、何か尋ねられても愛想笑いを浮かべ、誰も快く接してはいなかった。彼がただ威張っているだけの道楽王子だった為である。
　しかし今は違う。狩りに出るようになって周りの評価は一変したのだ。
　リューンはこんな場面に会う度にリスクは高いがこの偽りの狩りを始めて良かったと頭半分でそう思う。
（しかし、もしこの嘘が白日の下に曝け出されてしまったら？）
　リューンはその事がいつも頭の片隅にあるが、何かを得るには何かの危険にさらされる事も仕方の無い事だと自分に言い聞かせる事にしている。
　そして、いつかこの秘密をエリオットに打ち明けようといつも考えている。
　エリオットはラーメンを、リューンは日替わり定食を頼んだ。
　この城内の食堂では王族とその追従者は基本的に無料で何でも食べれる。
　もちろんリューンはただの衛兵では無くエリオット付きのただ一人の守護兵である為、彼も例えエリオット同伴でなくとも城内での飲食は全て無料である。
　しかし、当然リューンはそんな事を特権として許されているとし

て安易に喜ぶような小さい人物ではなかった。
リューンはゆっくりとそれでいてテンポ良く、実に手際良く日替わり定食を食べていた。
今日のメニューはから揚げ定食だった。昨日は焼き魚定食で、その前は麻婆豆腐定食だった。
一方、エリオットはラーメンの汁をテーブルや自分の胸元の服に飛ばしながら食べている。
エリオットはジークムントの前では畏まって上品に振る舞い、食事のマナーも見事なまでにこなすが、一旦父の居ない所にでると、この様にだらしない振る舞いを見せてしまう。
彼にとって父ジークムントは頭の上に重い石が一つ乗っているようなものだった。
エリオットはかなりの小食であり、また偏食家でもある。
この食堂で食べるのはラーメンか、うどんか、カレーのどれかで、いつもこの三つを三日間でローテーションさせている。
さらにエリオットは食べるのがすごく遅い。
麺を一口すすると、一旦ハシをどんぶりに置いてもぐもぐと噛み飲み込む。ハシを取ってまた一口すすって、ハシを置き、またもぐもぐと噛み飲み込む。これの繰り返しであり、噛むスピードが遅いみたいで、全部食べ終わるのは一般的な女性よりも遅いくらいだ。
それに、エリオットは食べながら良くしゃべる。
自分の横や前に座っている人と絶え間無くしゃべりながら食べる為、さらに時間がかかる。
リューンはこの事を余り良くは思っていなかったが、エリオットがより多くの人と話をする事で色々と視野が広がって人脈も出来、物事を幅広い見方が出来るように成長していってくれればと考え、ことに「食事中ですぞ」などと釘を刺す事はしなかった。
昼食を終えたエリオットはリューンを引き連れて城の中庭にいた。
この場所は城で働く人々が一時の休憩を取る所で、日当たりが良く心地よい。

今日もエリオット達と同じく多くの人が設置されているベンチに座り談笑していたり、また直に芝生の上で寝転んだりしてひと時の休息を楽しんでいる。
エリオットは芝生の上に寝転んだ。リューンはその側に立ち、一応周囲を見渡して不審者がいないか確かめる。
「リューン。お前も寝転べよ。気持ちいいぞ」
エリオットは瞼を閉じてそう言った。
「いえ、私はこのままで。気にされないで下さい」
「お前こそ気にしすぎだ。ここは城の中だ。誰もオレを狙う奴なんていないって」
と、寝そべったまま笑った。
リューンは笑わずに、「万が一という事もありますから」と、だけ付け加えた。
そこへ――ガラの悪そうな三人組の若い男達が二人に近づいてきた。年齢は皆18、9歳くらいか。
「やぁ、王子。今日はまだ見なかったんで、どうしたんだろうと思っていたが…。ここに御出でだったか」
と、真ん中の男が声を掛けてきた。
一応敬語らしき言葉を使ってはいるが風貌はまるでチンピラ風である。
この三人組は城に住み王に仕える貴族の息子達で、最近エリオットの周りに群がるようになった連中である。確かに家柄は良いボンボンだが、それ故苦労を知らずいつも遊び呆けているバカ息子達だ。
リューンはこの三人を良く思わず、いつもエリオットに付き合うのを止めるようにと言っていた。
「おう」
と、エリオットは一声かけると、両腕を頭の後ろで組んで寝転がったままの姿勢で、
「オレは今日は忙しい。お前達の遊びには付き合えん。他の誰かを誘うんだな」

エリオットの突き放すような感じにチンピラ風の三人は顔色を変えて、
「何で忙しいんだ？何か用事でもお有りか？」
「ああ、今日はこれから兵法の勉強と剣術の稽古に出ねばならん。お前達に付き合っている時間はない」
と、つっけんどんに言った。
チンピラ風の三人はその言い草にムッとなり、何も言わずに立ち去った。
リューンは顔をほころばして、
「良かったのですか？」
「ン？なにが？」
「あのお友達の事です」
「ン？ああ、あんなのは友達でも何でもないよ」
「そ、そうですか」
リューンの声が思わずうわずった。嬉しかったのだ。
エリオットは自分にさえ聞こえないかのような小さな声で、
「本当の友達はここにいるしな」
「え？」
リューンは良く聞こえなかった。
昼休みが終わり、エリオットは勉強部屋に戻って、今度は兵法の授業を受けていた。
兵法の先生はレオナルドという人で、このジーヴェル国では有名な歴史研究家である。
年齢は６７歳で、頭は禿げ上がり、残った僅かな毛は真っ白で、顔はシワだらけである。背も低くエリオットより少し高いくらいであるから１６０センチくらいだろう。しかし年齢を感じさせない生気をいつも身に纏った、如何にも学者らしい老人である。性格も温厚でエリオットの多少のわがままにも取り立てて怒る事もない。しかし、その為エリオットに舐められ、「レオ爺」などと呼ばれるはめになっている。

エリオットは最初の３０分間だけはレオナルドの講義を受けながら教科書をぐぐっと凝視していたが、限界が来たのか、頭がショートして気絶するように深い眠りに就いた。
レオナルドはエリオットが眠っているのに気づいたが、温和な笑みを洩らしてそのまま講義を続けた。
リューンはそのレオナルドの年齢を重ねた事で得たであろう寛大な対応に何か心地よさを感じた。
「オレ寝てなかったよな？ちゃんと勉強していたよな？」
エリオットは授業が終わるなりリューンにそう、分けの分らない事を口走った。
寝ていたかいないかなどは本人が一番分っている事だが、彼は夢の中でも講義を受けていたのか？
リューンは微笑んで答える。
「ええ、立派に授業を受けていましたよ」
「そ、そうだろう！」
（アレ？オレ寝てたんじゃ…。いや、起きてたか？）
エリオットはちょっぴり頭の中がまだぼやけていた。まだ夢心地にいる為、はっきりと判断出来ない。
しかし5分、１０分と経ち頭が冴えて来ると「ああ、やっぱり寝ていただろう！」と気づきリューンに問い詰めた。
するとリューンは「あはは」と笑い、
「もう春ですからね～。字ばかり読んでいたら眠くもなりますよ」
「アハハ。そうそう。誰だってオレだって。そりゃ、あのレオ爺のまったりとした声聞きゃあ皆眠くもなるさ！」
「ええ、かくいう私も立ったままウトウトと…。危ない所でした」
レオ爺の話声は夜余り眠れない人に医者が処方する睡眠薬よりも遥かに強力な眠り薬であると二人で笑った。
次の時間は剣術の稽古で、これが今日最後の授業である。
エリオットとリューンは連れ立って城内一階にある兵の訓練場に向った。

第二話　リューンとエリオット（後書き）

いつもこの物語を読んで下さって有難う御座います。さて、第二回目の登場人物はもう一人の主人公エリオットです。というかエリオットの方が目立ってる！？エリオット・ハイル―１５歳。男。ジーヴェルを治めるジークムントの長男。体が小さいが、気が強くわがままな王子。年齢以上にあらゆる面で未熟でいつもトラブルメーカー。身長１５８センチ、体重３５キロ。クセっ毛でブロンドの髪。目はブルー。容姿は乙女の様。父親であるジークムントに余りに似ていないので色々と変な噂もチラホラ。剣術も兵法も何一つ身に付いていない。勉強嫌いの道楽王子。ただ、根は悪くない。

第三話　道楽王子卒業？

城の一階の奥にある訓練場は国の軍兵の中でも選りすぐりの精鋭兵しか利用できないエリート兵の為の訓練場である。それ以外の兵は城の外の兵舎とそれに隣設されている訓練用グランド。そして城下町にある４つの兵士の訓練用グランドで訓練をしている。

城内のこの訓練場は南側の壁に幾つもの大きな窓を作っておりカーテンを開けば太陽の光が差込んできて、部屋全体が明るくなるように作られている。

今この場所ではいかつい男達が鉄製の剣や槍を持って互いに攻撃し合い腕を磨いている。

エリオットとリューンはこの訓練場に姿を現した。

その姿を見て、「おぉ…」と数人の兵士が声を挙げた。

兵達が驚くのも無理なく、エリオットがこの場に現れたのは実に三ヶ月ぶりだった。

エリオットの表情からいつもの余裕が消え、顔が強張り、動きがぎこちなくなっている。

エリオットにとって正直他のどの授業よりもこの剣術及び武術の稽古が一番苦手で、嫌で、恐ろしく、最も苦になる授業なのだ。

机に張り付いて行なう授業なら例え分らなくても教科書を見ていれば事なきを得る事が出来るが、この剣術、武術の授業は自分の腕前の度合いがダイレクトに皆に伝わってしまう。

エリオットの筋力では鉄製の剣はろくに扱えず、せいぜい短剣を少し長くした程度の小型の剣しか使えない。

そうなってくると体が小さい為にリーチの短いエリオットにとって、訓練での相手との対戦で短い剣を使う事は圧倒的に不利である。エリオットが相手の体に剣を当てる為には相手の懐に深く入り込まなければならず、この訓練においてもエリオットは相手に自分の剣を当てる前に大抵相手の剣をくらい負けてしまっていた。

そんなこんなでこの剣術の授業はエリオットにとって、自分の非力を思い知らされ自尊心が酷く傷つく、誠にもってなるべくなら遠慮したい授業なのである。
エリオットの姿を確認して近づいて来た者がいた。その男はにかっと笑っている。
長身で筋骨隆々。短く刈り込んだ髪とさわやかな笑顔が印象強い体育会系の男だ。
この男、名をハイマンといい、エリオットの剣術の先生である。
ハイマンは剣術、武術に精通し、また人当たりの良さからこの訓練場の師範代として精鋭兵達を日夜鍛えている。
そしてエリオット王子にも特別待遇で毎日この時刻に９０分間マンツーマンで教えている。
ただ、ここ三ヶ月間はエリオットがサボっていたので一度も指導していない。
フランチェスカもレオナルドも、そしてこのハイマンも皆エリオットに対しては強制力を持ち合わせていないらしく、皆エリオットが授業を受けに来なくても誰も怒りもしなければ、探し出してきて無理やりやらせる、なんてことも無い。
ただそれはエリオットが王子であるという事も大きな理由の一つだが他には王妃セシリアの計らいによってである。
セシリアはエリオットが自発的に勉強や剣術の稽古に励むようになるまで寛大な心で見守って欲しいと、彼らに申し出ていたのだった。
王妃の意を汲み取って、エリオットの先生達は皆だれもエリオットを咎めないのである。
「これは王子。お久しぶりです。今日は訓練に来られたのですか？」
にこやかに問うハイマンにエリオットはぶすっとして、
「ああ、頼むよ」
と、少しバツの悪そうに答える。三ヶ月間さぼってきた事にいくらかは罪悪感があるみたいだ。

ハイマンは笑顔を崩さずに、
「では…。久しぶりなので、始めに勘を取り戻すために剣の素振りでもしますか」
ハイマンはそう言って刃の無い練習用の鉄製の小型の剣をエリオットに渡した。
「す、素振り、か…」
エリオットは露骨に嫌な顔をした。
彼はこの『素振り』というものがひどく嫌いだった。
目標とする相手もおらず、ただひたすら剣を振りかぶって、振り下ろし、また振りかぶって、振り下ろす。これの繰り返し。単純な様であるが、剣を手に馴染ませ振る事によって相手に斬り掛かる感覚を覚え、見えない敵を想像しながら振る事で相手との距離感を掴み、様々な状況に応じて剣を体の一部のように扱う為の練習となるのである。剣術の基礎こそ、この『素振り』なのである。
しかし、エリオットは『素振り』の練習を、剣を振る持続力を高める為の筋力のみを鍛錬するだけの行為としか考えていない。
――コツコツと努力し、一歩一歩着実に進んで行く。もちろん時には後ろに下がってしまう事も、その場で立ち竦んでしまう事もあるだろう。しかし、どんな困難な時もいつも前に向き直り常に前に進もうとする意思を持って行動すれば、人は必ずその先で何かを見つける事が出来る――。
と、その様な事を町の教会の司祭さまから聞いた事があるエリオットだったが、いまだにその言葉が真実であるかエリオットは分らないでいた。
エリオットは嫌々しく顔をひきつらせながら「1，2，3…」とその手に持った鉄製の小型の剣を振る。「5，6，7、…」「15，16、17…」
と、ここでエリオットは剣を持っている左手をだら～んと垂らしてしまい、さらにその剣が手から滑り落ちて床にカラ～ンと甲高い金属音を鳴らした。

「あ～！？もうダメだ！」
エリオットは彼の利き腕で剣を握っていた左腕を右手で掴み、ひきつった筋肉を揉み解した。
（２０もいかずに…）
側で仕えるリューンは正直呆れた。いつもエリオットの側にいて彼が何の運動も鍛錬もして来なかった事は知っていたが、ここまで筋力が落ちていたのか、と驚いた。
そんなリューンとは反対にハイマンはその笑顔を崩さずに、
「王子。暫く休んで宜しいですよ。回復したら、また始めて下さい」
そう言い残すと他の兵達の所へ行って指導し始めた。
エリオットは訓練場の隅に置いてある椅子に腰掛け、まだ左腕を触っている。
リューンはエリオットの横に腕を組んで壁を背にして立っている。
エリオットは椅子に座ったまま前のめりになり、俯き床に視線を落とし、
「なぁ。リューン。オレは剣は嫌いだ。弓なら自信があるんだがな…」
リューンはこれには答えなかった。
エリオットの弓が上達したのは彼の錯覚で、実際は３ヶ月前の腕前となんら変わってはいない。
いや、それどころか狩りで成果があったことにかまけてエリオットはこの三ヶ月、弓の鍛錬、体の鍛錬も何もして来なかった。今の彼は三ヶ月前よりももっと弓も剣術もヘタクソになってしまっている。
リューンはかがんでエリオットの耳元で囁く。
「王子。やはりもう少し体を鍛えなければいけないのではありませんか？」
エリオットはブスっとして、
「お前もオレの弓の腕前は知っているだろう。オレは剣術や武術は嫌いだが、それならそれで別に上手くなろうとも思わん」

リューンは少し驚いて、
「どうしてですか？上手くならなくても良いと？」
「オレは王子で将来は王だ。王子や王が戦で兵達に紛れて敵と戦うなんて事はまずありえん。王子は王と供に軍の後方でドカッと構えておればいいし、王になったら、それこそ有能な部下に作戦を命じて自分はやはり後方で戦の行方を見守る。それくらいはリューン、お前だって知っているだろう。だからオレは剣術や武術、いやもっと言えば弓の腕前さえ本当は要らないのだよ。ただ狩猟の一つくらい出来ないと立場的にまずいからな。オレはそれで狩りをやっているわけだ」
リューンはある意味この言い訳とも取れるエリオットの口上に真実を見た気がした。
確かにエリオットのいうように『軍の大将は前線では戦わない』それに『大将を守る為に周りには屈強の衛兵がついている』つまり、エリオットの弁は正確に的を得た発言だ。
ただ完璧ではない。
リューンは口を真一文字にし、
「しかし王子。最後に頼れるのは自分自身です。敗戦で逃げ延びる際に盾となる従者が少ない時など、敵の追っ手から自分の身を自分で守らねばならない時もあります。また、自身が武術の腕前を高めている事で部下達から信頼され忠誠を得る事にも繋がります。剣術、武術は努力して初めて会得する事が出来ます。何の苦労もしない大将には部下は心底からは付き従う事はありません。体を鍛え、剣術、武術の腕を上げる事も軍の大将となる王にも王子にも大事な事です」
エリオットは苦笑して、
「お前にはかなわんな…。その通りだな」
エリオットは目が醒めたといわんばかりに椅子から立ち上がると、剣を持って「1、2、3…」と素振りの練習を再開した。
リューンはその光景を見て微笑んだ。
エリオットが変わってゆく。

リューンの心に穏やかな風が吹いた。

第三話　道楽王子卒業？（後書き）

いつもこの話を読んで頂いて有難う御座います。第三回目の登場人物の紹介は、思ったより話が進まず取り立てて紹介するキャラがいないので今回は別の話を。この話はお気づきの方も多いかと思いますが、時代背景は三国志と中世ヨーロッパの世界観をミックスした作りとさせて頂いています。国の名前からしてそうです。ギーエン→魏　ゴズウッド→呉　ジーヴェル→蜀　という具合です。ちなみにリューンのモデルは劉備玄徳で、エリオットはこちらもアニメ『鋼鉄三国志』の劉備がモデルとなっています。では、次話もご愛読宜しくお願いします！

第四話　ゴズウッドの王子

王妃セシリアと王女エリス、そして守護兵リューンの期待も空しく、エリオットの頑張りは3日で挫折した。与えられた授業や訓練を全てすっぽかして、日の高いうちから城下町へと降りて闘鶏などの遊びごとに耽っていた。母である王妃にしろ妹であるエリスも、そして彼にいつも付き従っているリューンも頭を抱えたが、皆長い目で見るスタンスでエリオットを見守ろうという流れに落ち着いた。

そんなある日、突然南の大国であるゴズウッドから使者が訪れ、同盟を結びたいとの王であるアダル直筆の書状を持ってきていた。ジークムント王は長く対立している北の大国ギーエンに対抗すべくこの同盟を快く引き受けた。

それから2週間程経ってからゴズウッドの王アダルの一行がジーヴェルの王都ホーリーウォールへとやってきた。両国の親交を深めるためにジーヴェル側が招待したのだ。

アダル達一行はホーリーウォールで格別のもてなしをうけて皆気分良く過ごしていた。

このアダルには息子がいて今回もこの旅行に連れて来ていた。名をロキといい、年齢は18歳。自国であるゴズウッドでは勇猛で名を馳せる王子である。

ロキはこのホーリーウォールに来てこの国の王子であるエリオットと引き合わせられて（なんだ？この貧相な王子は！こんな奴が次期国王となるのならばこんな国に恐れを抱く必要もなければ、同盟を結ぶまでもない）と思い、心の中であざけ笑っていた。

ある時、宴席の最中にロキは同じ王子であるエリオットに剣術での手合わせを申し入れた。

リューンから「お引き受けなされてはなりません」と耳打ちされたエリオットは、始め嫌な顔をして話を受け流していたが、ロキが「貴殿はオレを怖れているのか？手合いくらいなんでもないだろう」

と言い、負けず嫌いのこの少年王子はカーっと来て引き受けてしまった。
その夜、リューンは「なぜ引き受けたのですか！」とエリオットをたしなめたが、エリオットは「すまん」と一声力なく発するだけだった。
リューンはエリオットがゴズウッドの王子に勝てる見込みは無いと確信していた。
いや、リューンが一番心配している事はエリオットの敗北ではなく、エリオットが手合いで満足な戦闘を行なえず、無様な醜態を晒してしまうのでは？という事であった。
こういう事は人の噂話になりやすいものである。「ジーヴェルの王子は弱くて情けないぞ」とゴズウッドや他の諸侯に笑われ語られる事になってはジーヴェルのこれからの未来にも関わってくる。
「何とかしなければ…」
リューンは考えを巡らしたが、良い案は思い浮かばず眠れぬ夜を過ごした。
次の日――訓練場で両者は対決する事となった。周りには野次馬連中が声を挙げて応援している。ジーヴェル側の者達はエリオットを、ゴズウッドの従者達はロキを、当然言葉で後押しをする。
「お手並み拝見ですぞ、エリオット殿」
ロキの言葉にエリオットは萎縮する。エリオットにはこのロキを負かすような自信は少しもなかった。エリオットとて馬鹿ではない、自分の剣術の腕前が如何に酷いかも自覚している。その上相手はゴズウッドで勇猛であると噂の男。身体が小さい自分と比べて遥かに体格が良く、その顔も凛々しく如何にも勝負強そうである。ふと自分の足を見てみるとガクガク膝が震えている。エリオットは出来る事ならこの場から逃げ出したくなった。
しかし、無情にも手合わせの「開始」の合図が掛かった。始まった。もはや逃げられない。
対してロキは余裕綽々であった。こんなチビに負けるわけないと

思っているし、どうやって恥をかかせてやろうかとニヤニヤと口元を緩ませている。
「いつでもかかってきてもらって構わないぞ」
その上から見下ろしている態度にエリオットはカチンと来て、
「よし、いくぞー！」
と、訓練用の剣を振るってロキに斬りかかった。
しかし、通用はしない。軽く交わされ手でドンッと押されてヨロヨロと倒れそうになる。傍から見ても剣が重そうで扱い切れていない。
「どうした？ジーヴェルの王子は剣もろくに振れないのか？」
ロキの嘲笑にエリオットはますます頭に血が昇る。
「このー！」
と、何度と剣を重そうに振り斬りかかるがその度にロキに軽くあしらわれ、惨めな姿を露呈してしまった。
ロキの従者達はそんなエリットを見て、喜ぶ。
エリオットは自分を馬鹿にする笑い声に居たたまれない怒りと悔しさで一杯になった。
「こんにゃろーー！！」
とエリオットは意を決して剣を頭上に持ち上げ間合いを詰めて思いっきり剣をロキに振り下ろした。
しかし――ロキはさらりと交わして、
「そろそろいいか」
と、手に持つ刃の無い剣をエリオットの胴に勢い良く叩き込んだ。
「ぐはぁ」エリオットは後方に2メートル程吹っ飛んだ。鎧を着けていなければ大怪我をする所であったであろう。
「それまで！」
勝負はあっさりついた。
「我らが王子の勝ちだ！」「それにしてもジーヴェルの王子は情けないのう！」
と、ゴズウッドの従者達は口々に歓喜の声を挙げエリオットの醜

態を笑う。
対してジーヴェルの者達は、
「ああ、エリオットさま…」「やはり、あの身体では無理か」「弓での勝負なら負けはせぬのだがなぁ
」
その一声をロキは聞き逃さなかった。
「弓なら負けない？そこの王子は弓が得意なのか？」
ジーヴェル側の野次馬は声を揃えて、
「ああ、そうじゃ。エリオット様はこのジーヴェルでも指折りの弓の使い手じゃ」「弓での勝負なら誰にも負けはせぬ。貴殿とて例外ではないぞ」
「ほぅ…。そうか…」
ロキは鎧を外して腹を押さえて座っているエリオットを見、
「貴殿は弓が得意なのか？」
リューンはマズイ！と思った。彼だけがエリオットの弓術の腕前の真相を知っている。
しかし、ここで唐突に場ににつかわしくない女性の甲高い声が響いた。
「ええ！お兄さまの弓は天下一品ですわ！貴方など足元にも及ばないわ！」
皆が声のする方を振り返って見ると、そこにエリオットの妹のエリス王女がキリリとその大きな目を吊り上げて仁王立ちしていた。
「おぉ…」
ロキは思わずエリスに見入った。ロキはこのジーヴェルに来て、この国の王女であるエリスに初めて会った時から、その可憐さに目を留めていた。
ただ、それは一目ぼれということまでではなく、少し気になったという程度。
しかし、この状況を利用すれば…とロキの頭の中に悪巧みが浮かんだ。

ロキは下卑た笑いを浮かべたままエリオットを見て、
「よろしい。エリオット殿の得意な弓で再仕合といこうではないか」
と、述べた。
ジーヴェル側の野次馬達は意気を強めて、
「おお！それが良い！ぜひ弓での勝負を！」「弓でならエリオットさまが負けるはずがない！」
と意気揚揚となってきた。しかし、ただ一人だけ憂いの表情をする者がいた。
リューンである。
リューンはこの程のエリオットの醜態にも肝を潰したが、続くこの展開にも心の平静を保つ事が出来なくなりそうである。
しかし、事態はさらに悪い方へと動くことになる。
「ああ、弓で勝負だ」
エリオットはすくっと立ち上がって悔しさを打ち消すように毅然として答えた。
ロキはそんなエリオットをフフンと鼻で笑い、
「エリオット殿。貴殿はそんなにも弓が得意か？」
エリオットは少し間を空けてから真っ直ぐにロキの目を見据えて、
「ああ、そうだ。得意だ」
「実はオレも弓が得意なんだが…。弓でなら、オレに勝てる。そう言うのだな？」
「ああ…」
ロキは答えを聞いてからじっくりと間をとって、
「ならば、ひとつ賭けをしようじゃないか？」
「賭け？」エリオット同様、その場に居た一同が皆首をかしげた。
ロキは自分が今口に出している言葉を体言するかのように得意げに言った。
「ああ、賭けだ。もしエリオット殿が勝ったらオレは今までの数々の非礼を土下座をして詫びよう」
「土下座！？王子何とおっしゃいますか！？」

ロキの従者達が慌てふためいた。王子であるロキがもしそんな事をしたらゴズウッドの威厳は地に落ちる。「他国に招かれ歓迎されていたのに、その国の王子に勝負を挑んで負けて土下座して許してもらった情けない王子」と、このアースガルド全土に広まり、末代までの恥となるだろう。

ロキはそんな事を考えているのか、いないのか。言葉を続ける。

「だが、もしオレが勝ったら…」

と、突然視線をエリスに移して、

「オレが勝ったら、エリス殿をオレがもらう！」

「！？」

皆驚いたが、一番驚いたのはエリス本人である。その次にエリオットとリューンの二人だろう。もちろんジーヴェルの野次馬達も酷くびっくりした。そして、「それはいくらなんでも」と皆口々に顔色を変えてお互い見合う。一国の王女の扱いをこんな互いの王もいない非公式な場で、嫁にやる、貰うなどと決めていいことではない。

「それはダメだ！」

と真っ先に叫んだのは兄であるエリオットではなく、リューンだった。

彼はエリオットがロキに勝てるわけが無いことを一人確信しているため、当然といえば当然の発言だ。

ロキは怪訝そうに顔を曇らせて、

「そこの衛兵。なぜダメなのだ？」

「ン…」

リューンが口ごもると間髪入れず当人であるエリスがその透き通る声を張った。

「いいわ！貴方が勝ったら私をゴズウッドに連れて行くがいいわ」

決意を込めたエリスの表情に皆息を飲んだ。

「エリス！？」「エリスさま！？」

ロキは「ハッハッハ」と高笑いし、

「その度胸！ますます気に入った！どうしても手に入れたくなった。

そういうことで、勝負を始めようか？エリオット王子よ！」
ロキは自信を漲らせニヤリと卑しい笑みをその頬に宿した。

第四話　ゴズウッドの王子（後書き）

いつもこの物語を読んで頂いて有難う御座います。今回の登場人物紹介は王女エリスです。エリス・ハイル。１４歳。女。エリオットの妹でジーヴェルの王女。エリオットよりも背が高く（１６３センチ）髪は赤茶がかった黒。瞳はエメラルド。容姿は可憐でスタイルも良い。優しく芯がしっかりした少女で、周りにいる者皆から好かれている。真面目で勉強も出来る事から城の重臣達からは中身がエリオットと反対だったら良かったと言われている。エリオットの数少ない理解者の一人である。昔からリューンを密かに想っている。

では次回からもご愛読の程よろしくお願いします。

第五話　弓勝負

「それでは、弓の勝負を始めようではないか？エリオット王子」
ゴズウッドの王子ロキは自信に満ちた笑みを隠そうともせずそう声を張り上げた。
「いいだろう…」
エリオットはそう答えたが、辺りに漂う重い空気の中、場違いな声を発する者がいた。
「待って下さい！少しお待ちを！」
声の主はまたもやリューンだった。リューンは必死だった。それもそうだろう。この勝負が行なわれてしまったら、当然エリオットは無様に破れエリスがこの目の前にいるいけ好かない男のものとなってしまう。そんな最悪の結果が確信的に起る勝負を始めさせてはならない。どうする？リューンはこの危機を乗り越えるための何か良い案はないか、頭を回転させる。
「また、お前か」
ロキは二度に渡って口を挟んできたこの一兵士に少し腹が立った。
「お前なんぞ一兵士が発言するような場ではない。控えよ」
ロキの言葉には明らかに怒気が含まれている。
しかし、ここで引くことは出来ない。これは彼がエリオットの守護兵になって初めて訪れた正念場である。リューンは頭を深々と下げて、
「申し訳ありません！しかし、敢えて口を挟む事をお許しください！」
「こやつは何の階級の者か？」
ロキは露骨に怒りを込めてジーヴェルの者達に訊いた。それにはエリオットが答えた。
「この者はオレの守護兵を務めるリューンという者だ。ジーヴェルの名門貴族の公子だ。身分とて高く、貴殿と論ずるにも不足はない

はずだ。ロキ王子よ」
「ほぅ…。貴族の公子ね…。ならば良い。申してみよ」
ロキは冷めた目でリューンを一瞥した。
リューンは頭を下げたままの姿勢で、
「怖れながらエリオットさまは最近山での狩りの時にだけしか弓を使っておらず、この訓練場では弓の修練をもう何ヶ月も行なっていません。ですから、動かない的を射る事にはブランクがあり実力を発揮できないものと思われます。そのような状態でこのような大事な勝負をさせるわけにはいきません」
「ほぅ…。ブランクとな…。それで貴公はどうしたいと言うのだ？」
「はい。それで、エリオットさまに代わり私に相手をさせてもらえませんか？」
「なんだと？貴公がか？」
リューンは顔を上げて、
「はい。私は狩りでの腕前はエリオットさまに遠く及びませんが、訓練場での的を射抜く技量はエリオットさまにも引けを取らぬと自負しております。ですから、もし私が勝てばロキさまはエリオットさまにも勝てません。この時点でエリスさまの事は諦めてください。しかし私が負ければロキさまは今度は外に出て、狩りでエリオットさまと勝負して、そこで貴方様が勝ったならエリスさまの事は好きになさいませ。その上、ロキさまが負けた場合は土下座もエリオットさまに謝る必要も御座いません。この条件でどうでしょうか？」
ロキはせせら笑って、
「つまり貴公らは一度の負けは許され、オレは二つ続けて勝たねばならんという事か…。随分不公平な話だが…」
しかし、この王子には己に対して絶対の自信がある。それはエリオットの様な狩りが得意であるなどという薄っぺらな自信ではなく、自分自身の力を他者に誇示し、いかなる者にも勝ってきたいう揺ぎ無き自信である。
「いいだろう。その条件で受けて立つぞ」

「有難う御座います」
リューンは心の中でほくそえんだ。この二段構えの策に、自分に自信を持つがあまり、奴は引っ掛かったのだ。
「では、早速始めるぞ」
一同は的が設置されている訓練場の隅に行き、勝負をするリューンとロキは３０メートル先にある的を見据えて弓と矢を持って並んで立った。
「お先にどうぞ」
ロキはここでも余裕を見せる。
「はい。では私から」
リューンは遠くの的を正面に置いて弓に矢をつがえてゆっくりと弦を引いた。
そして狙いを定めると――フュッと矢を放った。矢は空気を切り裂いて一直線に飛んで的に刺さった。皆が見ると見事に的のど真ん中を射抜いていた。
「おぉ！」と、一同どよめく。
（自分から挑んでくるだけあってなかなかの腕前だ）
続いてロキがリューンが射た的の右隣りの的を正面に置いて、弓をぐぐっと引いて狙いを定めて矢を放った。そしてそのロキの放った矢も的のど真ん中に突き刺さった。
「おぉ！さすがロキさま！」
「ゴズウッドの王子も噂通りの腕前だ」
ロキはフフンと鼻を鳴らして「どうだ！」と言わんばかりの表情を見せた。対してリューンは彼特有のポーカーフェイスは崩さない。
第二回戦。リューンは弓を構えて弦を引き矢をフュッと放った。
そして、その矢は先にリューンが的の突き立てた矢の棒の部分の中央を貫いて的に刺さり、その棒の部分は四方八方に割れて木切れとなった。寸分たがわず先の矢と同じポイントを射抜いたのだ。
「おおぉ！！」「あの衛兵。出来るぞ！」「リューンどのの腕前もエリオットさまに引けを取らぬのでは！」

しかし、この結果に一番驚いたのは対戦相手のロキだった。ロキも弓の達人であるから、今のリューンの業が如何に優れているかが分る。
（こいつ…。オレでも3、4回に1度しか出来ない業を何食わぬ顔であっさりとやってのけおった）
ロキは心中穏やかではなかったが、リューン同様表情には出さず的を見て弓を引いた。
そして矢を放つと、ドッと的に刺さった。
「おおおぉ！こちらもだ！」「凄い！」
と、感嘆の声の通り、こちらも先を矢を八方に割れさせ的のど真ん中に突き刺さり、全く同じポイントを射抜いていた。
（ふー。なんとか成功か…。しかし、こやつ…）
ロキの表情から余裕が消えていた。
リューンは的をじっとみて構え、再び弓から矢を放つ。すると、その矢はまたもや第二射した矢の棒を割って、三度同じポイントを射抜いたのだった。
「おおおおぉぉぉ！なんという腕前か！」「神業だ！！」
ロキは一瞬にして顔から血の気が引いた。
（何て奴だ！？こいつ…。何者だ！？）
明らかに動揺していたが、（まだまだ）と自分に言い聞かせ自分を奮い立たせる。
しかし、ロキはこの時、すでに自分で負けを覚悟してしまった。二回続けて出来るはずが無いと思ってしまったのだ。
こうなってしまうと勝負事というものは決着がついてしまうもので。案の定ロキの第三射は的の中央にこそ刺さったが第二射の矢の棒に当てる事は出来なかった。
ここでリューンの勝利が決定した。
「そんな…。王子が負けるなんて…」「誰にも負けたことがないロキさまが」
と、ゴズウッドの従者達は落胆し、互いに慰めの言葉を掛け合っ

ている。
　それとは反対にジーヴェル側の者達は狂喜乱舞。なにせ高慢ちきなゴズウッドの王子を負かしたのである。皆気分がスーとした。それと同時にいつもエリオットの影に隠れて目立たなかったリューンの才能を皆口々に賞賛の言葉を並べて労った。
　しかし、ジーヴェル側の人間の中で一人だけ浮かない顔をしている者がいた。
　エリオットだ。
　彼はこの結果を喜びこそしたが、自分とて余り知らなかったリューンの弓の腕前を見て、度肝を抜かれ、ある事が心に浮かんだ。
（オレはこんな男と競争して狩りで勝っていたのか！？）
　エリオットは明らかに可笑しいと思った。自分の実力では今リューンが見せた離れ業をする事など到底出来ない。では、なぜオレはリューンにいつも勝っていたのだ？
　エリオットの妹であるエリスは喜びの輪から離れて一人落ち込んでいる兄を見つけて、なんだろうと近づく。
「兄さま？どうかいたして？」
　と、気遣うがその目を虚ろで返事はない。
「兄さま？」
　と、エリスが肩を揺らすとハッと我に返り、自分の正面にエリスがいる事を確認すると、
「ン？なんだ、エリス。どうかしたのか？」
「もう、どうかしたかじゃないです。兄さまがぼーとして。せっかくリューンさまがあの自信家を打ちのめしたというのに。まるで兄さままでリューンさまに負かされたみたい」
「！？」
　エリオットの身体が一瞬固まる。そう、エリスの言う様にエリオットは今、恐ろしい敵と遭遇し、自分も知らぬ間に叩き潰されたのだった。
（これは何か裏がある。リューン…お前は一体どういうつもりで…）

エリオットは事の真実を今はっきりと自覚したのだった。

第五話　弓勝負（後書き）

いつもこの物語を読んで頂いて有難う御座います。さて、今回の登場人物の紹介は何かと目立つロキに登場願います。ロキ・ウッドノード。１８歳。男。身長１７８センチ。体重８０キロ。黒髪に青の眼。ゴズウッドの勇猛果敢な若き王子。剣術、弓術、馬術などこと戦う事にかけてはエキスパート。自信過剰で高慢ちき。ただ礼には厚く仲間内での評判はいい親分気質の青年。リューンに弓で破れ、それ以来何かとジーヴェルに対抗心を燃やすことになる。

第六話　ロキの執念

エリオットが剣術の勝負でロキに破れ、そのロキを弓の勝負でリューンが破ったという話は日が沈まない内に城中の噂話、引いては国の危機を救ったリューンの英雄談として騒がれる事となっていた。

この事にリューンは悪い気はしなかったが、余り手放しでは喜べない。裏方の仕事である彼にとって、自分の事を騒がれるのは何か居心地が悪いのである。それにエリオットの手前、自分が褒められエリオット以上に目立つ事は感心は出来ない。

そのエリオットはリューンの予想通りお世辞にも機嫌がいいとは言えない状態だった。

その夜エリオットは自室でリューンに詰め寄っていた。

「なぁ、リューン…。お前、何かオレに隠してないか？」

「……」

リューンはすでにエリオットの言わんとしていることが分っていた。

しかし、その事を口にするのはためらう。出来るならば暗黙の了解の下に話題にしないでほしいとさえ思っている。

しかし、何事もはっきり白黒つけねば気が進まないのがエリオットの性分。リューンもその事を良く知っていたからもはや言い逃れは出来ないと腹をくくってもいる。

「お前のことだから、オレが何を言っているか分ってるな？」

リューンは一つ深い深呼吸をして、

「ええ。全ては私の浅慮ゆえの出過ぎた真似でした」

「狩りのことだな？」

「はい」

フーとエリオットも溜息を洩らし天井を見つめて暫く黙った。

薄々何かおかしいとは思っていた。自分のように弓の訓練もろくにしない者がいつも得物を見事なまでに急所を射抜いて仕留めてい

ることなど、どう考えても常識的には有り得ないことだった。
　しかし、楽しかった。馬にまたがって山道を駆け、弓で獣を射止め、持ち帰っては賞賛の嵐。皆からは尊敬され、どこに言っても笑顔で歓迎された。例えそれが他人の力であっても、自分にとってかけがえの無い３ヶ月間であった。それを考えると怒りはスーと静まっていった。
「もう良い。この事は水に流す」
「え？」
　リューンは酷く怒られるものと思っていたので、このエリオットの反応に驚いた。
　エリオットは話を続ける。
「リューン。お前の気持ち…。オレのことを思ってのことだろうから、オレはむしろ感謝さえしている。ただ、狩りはもうヤメだ。いつまた今日のようなことが起きるかもしれん」
　エリオットは昼間剣術の勝負で、ロキに子供のように扱われ、奴の従者達にあざけ笑われたことを思いだしていた。
「しかし、どうにかしてあの男に仕返しが出来ないものか…。このまま国へ帰られるのも口惜しいな」
　だが、エリオットは何一つ取り得のない少年である。自分だけの力でやり返すことは出来ない。それに相手はつわものの王子。王子としての立場こそ互角だが能力の差は歴然だ。
　しかし、エリオットは大がつくほどの負けず嫌いである。彼はロキが国に帰る前に何とかやり返せるアイデアが無いかリューンに訊いた。
　リューンは首をかしげ、考え込む。しかし、良い案はすぐには思いつかない。大体エリオットに何も能力的に秀でた所が無い以上、他者をやり込めるのは難しい。
　それに、確かにロキは気に食わない男だが、今回彼がわざわざこの国に赴いたのはジーヴェルとゴズウッド両国の親睦を深めるためにこちらから招待したからである。その招待客をやり込めて負かせ

てやろうと思うのは少し話の本筋から外れている。
「エリオットさま…。やはり、ここは我慢のしどころかと。ゴズウッドとの同盟は我がジーヴェルにとっても天の恵み。ギーエンと対等に戦うにはゴズウッドとの同盟が必要不可欠です。ここであの王子と事を構えて怒らせでもしたならこの同盟がご破算になることも有り得るかもしれません。彼らが気持ちよく国に帰るまで、ここは穏便に済ませるべきかと思われます」
「う～む…。その通りだな…」
エリオットは腕を組んで頷く。
「ここはエリオットさまが一歩引いて、寛大なるお心と大きな器量をもってお振る舞いなされば万事が上手くいくことと思われます」
「そ、そうだな。オレが大人の態度で臨めば良いという事だな！」
「はい。そうです」
「そうか、そうか。宜しい。そうしよう！」
と、最後に「あっはっは」と笑ったが、顔は少々引きつっていた。
やはり負けたままでいるのが悔しいのだ。
一方、客室を宛がわれているゴズウッドの王子ロキは、室内で独り厳しい表情をし、椅子に腰掛けて手を組んで何やら考え事をしていた。
それは、やはり昼間、弓の勝負でリューンに敗北したことであった。
ロキは子供の頃から同年代の者達には剣術も弓も、そして素手での格闘（ケンカを含む）でも負けた事は無く、１８歳になり大人並の体格に成長した最近では、大人も含め誰にも敗れたことは一度もない。それが今日、自分よりも遥かに小さい体躯の優男に敗れてしまった。弓での勝負なので体格の優劣が関係なかったとはいえ、昼間の勝負はロキの完敗だった。しかしロキは破れて尚、対戦相手であったリューンの神業ともいえるあの弓術に舌を巻いた。
（あんな芸当はちょっとやそっとの腕前では出来ぬ。しかも奴は始めからオレに勝つつもりで勝負を挑んで来た。一国の王女の身を賭

けての事。自分の腕を心底信じていなければやれない勝負だった）
ロキはおもむろに椅子かた立ち上がると、その椅子を力いっぱい蹴飛ばした。椅子は勢い良く飛んで室内の壁に当たり床に落ち、背もたれや足が折れて無残な姿となった。
「クソ！あの野郎！このままでは済まさんぞ！」
ロキは般若のような醜い形相になり、リューンへの報復を心に誓った。
暫く怒りに打ち震えていたロキだったが、昼間の事を色々と回想している内に何か心に引っ掛かるものを感じた。自分を負かしたあのリューンよりもエリオットの方が狩りがうまいなどと有り得るわけがない。一体どういう事だ。その答えはすぐに出た。
（あのへなちょこ王子…。まさか、な。いや、そうだろう。ならば！）
ロキはその切れ長の青い瞳をギロッと光らせた。

翌日からエリオットとリューンはなるべくゴズウッドから来た招待客とは会わないように心掛けた。
同じ場所にいなければ、何かのトラブルが起きる事は無いと考えての事。
しかし、その作戦はもろくも崩れた。ロキがエリオットに話があるというのだ。
エリオットとリューンは顔を見合わせた。
「何を企んでいるのだ。あの高慢ちきな男は！」
「エリオットさま。仮病でも使って会うのをお止め下さい」と、リューンの助言。エリオットもそう思い、風邪と偽って会わないようにした。すると、次の日もロキが「話したい事がある」との言伝があり、エリオットはまた「風邪具合が悪い」と言って断った。
すると――その日、エリオットの寝室をロキが尋ねてきた。「お見舞い」だというのだ。
ロキは衛兵の制止を強引に振り切ってエリオットの室内へと入っ

てきた。
慌ててベッドに潜り込んだエリオット。リューンはエリオットの前に立ちロキと対峙した。
「これはエリオット王子。何でも風邪を引いたと聞いてお見舞いにあがりました。これはほんのお気持ちで」
と、リンゴやナシ、メロンなどのフルーツが山盛りに積まれているかごを近くにあったテーブルの上に置いた。
ロキはあの訓練場での勝負の時に見せたような卑下するような眼でエリットを見ている。
「顔色も良く。元気そうですな。これなら明日にでも風邪は治まるでしょうな」
エリオットとリューンは硬い表情を崩さない。こんな男がただ単に病人の見舞いなどに来るはずがない。それも昨日今日接点が少し合っただけの者の見舞いなど。この男の狙いは何だ？
（何か企んできたのであろう。話とやらを聞いては向こうのペースになる）
「エリオットさまはまだお体が万全ではありませぬ。さ、ロキさま。どうかこの辺りでお帰りください」
と、リューンは低姿勢でそう言った。ロキはこの目の前の男リューンを射る様な眼で見た。この優男が誰にも負けたことがない自分を打ち負かしたのだ。
その眼をチラッと見たリューンはこの男の狙いがエリオットではなく、自分であることに気づいた。
ロキは気合を漲らせていたが、パッと態度を紳士的に入れ替え、エリオットに視線を移して、
「この間のことはオレのいたずらがすぎた。許されよ。それでお詫びとして一緒に狩りに出かけようではないか。エリオットどのがいつも行っていると聞いている。最近は日も照って気持ちの良い天気だ。皆で出かけてわいわいと楽しもうではないか」
エリオットはこのロキの言い回しに「おや？」と思った。言葉通

りの意味なら非礼を詫び、そのお返しに仲良く狩りでもしてみな水に流さそうと、いう風に聞こえる。
しかし、リューンはそうは取らなかった。こんな自意識過剰でトップ志向、それで自分に絶対の自信を持っているこの男が負けたまま仲良くしようなどと、言葉に出す事すれ、心の中では思うはずがない。これは罠だ！とリューンはすぐさま見抜いた。
「どうですかな、エリオットどの？」
エリオットは一応と思いリューンを見る。するとリューンの眼が異様に険しい。そこでエリオットも「罠か？」と気づかされた。
エリオットは無理やり笑顔を作る。
「せっかくのお誘い嬉しい限りですが、風邪をこじらせてはいかないので後2、3日はこの部屋に篭っていようと思う。狩りはまた貴殿がこの城に来た時にでも楽しみましょう」
リューンは（なかなかの理由と言い回しだ）と、感心した。
ロキは口の端を吊り上げて、
（こっちの思惑に気づいたか。しかし逃げられはせん）
「それではエリオットどのの体調が回復するまで狩りはお預けといたそう。2日でも3日でも一週間でも10日でも待とう」
「え！？」
おかしい。ゴズウッドの招待客がここホーリーウォールに留まるのは半月だと聞いている。彼らがやってきて既に13日が過ぎている。あと2後に自国へ戻るという話の筈だ。
その事をエリオットがロキに尋ねると、ロキはこう答えた。
「オレとオレの従者達は日数に融通が利く、親父は政務で忙しい身だから2日後に国に帰るが、オレはまだここに残る。ここが気にいったのでね。もう少し居候させてもらう。この事はもう親父にもジークムント王にも言って許可を貰っている。心配することはない。ゆっくりと風邪を治して供に狩りを楽しもうではないか」
そこまで言ってロキは部屋から出て行った。
エリオットとリューンは目を丸くしてお互いに顔を見合わせた。

「本当だろうか？」
「はい。そうなのでしょう。つまりそこまでして私かもしくはエリオットさまに何か仕出かしたいのでしょう」
「こまった、な…」
「ええ、困りました、ね…」
二人は呆然としてあの嫌味な男が去って行った部屋の扉を見つめるしかなかった。

どうする？

第六話　ロキの執念（後書き）

今回の登場人物の紹介はお休みです。
ロキが随分活躍してますが、彼のモデルは孫策です。今そう思いました。悪い奴ではないので嫌わないで下さい。
では、次話も宜しかったら読んで下さい。

第七話　知恵比べ

エリオットとリューンは困り果てていた。
ロキの父親でゴズウッドの王アダルは既にこのホーリーウォールの城を出て、遥か南にある自国へと向かった。しかし、やはりあの傍若無人な王子ロキはいまだここに残っている。
エリオットとリューンは思った。奴の目的は明らかに自分達の失墜であろう。
奴はもう気づいている。今までのエリオットの狩りでの成果が、リューンによって捏造されていたことを。そして恐らく奴は一緒に狩りに行って、そのことを白日の下に曝け出し、エリオットを笑い者にする気であろう。そしてエリオットと一蓮托生のリューンでさえも、そのウソの片棒を担いだとして国中の民から糾弾させるつもりなのであろう。
あの男には同盟を結んだばかりの相手国の王子に対しての親しみや遠慮というものは無いのか？そんなエリオットの苛立ちにリューンが答えた。
「あのような人物は他のなによりも自分のプライドを優先する類の輩です。ここはいっそのこと、あの男の願いを叶えて供に狩りに行き、彼に勝たせて気分を良くしてあげたらどうでしょう。さすればあの男もすぐにでも意気揚揚とゴズウッドへと帰って行くでしょう」
エリオットはポンと手を叩いて、目を剥き出して、
「それは名案だ。つまり奴はオレ達の不正を見るまでもなく、ただ狩りでの勝利だけを土産にして国へと帰って行くということだな」
「はい。ですから、失礼ですが、エリオットさまは普通に狩りをしていればおのずとロキ王子が得物を射止めることで勝負はつきます。エリオットさまは普通に振舞って、何の策略も無く、ただロキ王子に負ければいいのです。それによって、我々にとってのこの一連の厄介な出来事は穏便に片付きます」

「確かにそうだ…。ただ今の言い分は少しカチンと来たがな」
「あっ。失礼しました」
と、リューンは頭をちょこんと下げた。
エリオットは嬉しそうに笑って、
「良い。本当のことだからな」
「恐れ入ります」と、リューンは恐縮した。
しかし、そうは言ったもののリューンは内心この計画ではまだまだ穴のある策であると思った。
自分達が守るべきものは、何よりもエリオットの狩りが自分の手によるものである事を誰にも知られてはならないという事である。その他の事はこの際大目に見る。その一点だけは他の何を犠牲にしても隠し通せねばならない。では、その為に今自分達に出来る事はエリオットが形だけでもいいから弓をそれらしく扱えるように訓練する事である。弓術の基礎的な形さえ出来れば得物を射止めるまでの技量などいらない。ただ単にロキの目を何とかぎりぎりに騙せればいいのだ。しかし、実はそれが難しい。ロキ程の腕前ならそんな付け焼刃の弓術など簡単に見破られるであろう。そこでリューンは全く違う案を思いついた。それは――。
次の日の昼――ロキがエリオットの部屋に風邪の直り具合を見にやって来た。
エリオット達は「来たか」と思い、なるべく友好的な姿勢で対応する。
「これはロキどの。今日はオレに何用かな？」
「風邪は治ったようだな。それでは狩りに行こうではないか？」
「ああ、その事か…」と、エリオットの表情は優れない。
ロキは内心（おやおや？）と思ったが平静を努め、
「どうされた。狩りに行くのが嫌なのですかな？」
と、エリオットの心中を計ってニヤつく。
（どんな口実があろうとも必ず引っ張り出す。逃がしはしない）
ロキは頭が回る上、一度決めたことは何があってもやり抜く、意

思の強さを兼ね備えたもののふなのであった。
「誠に持って申し訳ないのだが、オレは暫くは狩りには行けぬ」
ロキはへっと吐き捨て、
「なぜ行けない？何か狩りに行きたくない理由でもあるのか？」
エリオットはいかにも落胆したという様子で、
「実は、今朝険しい山の中を馬で走り、狩りをしている夢を見たのだが、いざ弓を引いて得物を射らんとしたその時に馬から落ちて、そのまま崖から転落する夢を見た。気になって城の占い師に占ってもらうと、それは正夢であるからして少なくとも1年は狩りに行くのを控えるように言われたのだ。そういう訳で残念だが貴殿との狩りは出来なくなった。申し訳ない」
「夢だとぉ！そんなものを信じるのか？」
ロキの狼狽した様子を見てリューンが答えた。
「占い師の予言は良く当たり、この城の者達は皆信じています。かくいう私も信者の一人です。もし宜しかったらロキさまも占ってみますか？ご案内しますよ」
「いや、オレは…いい、が」
エリットは間髪入れずに、
「オレも占い師を信じているのでね。悪いが、まだ死にたくないので狩りは遠慮させてもらう」
「なんだ、と！？」
(夢、と来たか。まさかこんな手を使ってくるとは。正夢などと間違いなくウソだろう。こいつらの口ぶりからして占い師とやらもグルだな。やられた。こんな抜け道があるとはな)
ロキはみるみる内に表情が硬くなった。そしてあからさまに不機嫌になり、
「分った。狩りはもうナシだ。オレも国に帰る。ただ、これで勝ったと思うなよ。1年後この城にまたやって来る。その時にまでその守護兵に弓を鍛えて貰うのだな」
と吐き捨てるように言うと、荒々しく扉を開いて廊下へと消えて

行った。
エリオットとリューンは視線を合わせて、「あはは。うまくいった」と笑った。
その次の日に2日前に城を出た父アダル王を追うようにロキは従者を連れてゴズウッド領へと向けて出立した。その顔は口惜しさで顔の筋肉が歪んでいるかのようにも見えた。
ゴズウッドに帰り着いたロキは父親であるアダル王から、
「お前。こんな早く帰ってきて。まだあの城にいたいと言って無理やり残ったのはお前だろう」
と、これには如何な勇猛で知られるロキ王子も何も弁明出来なかったという。

第七話　知恵比べ（後書き）

いつもこの物語を読んで頂いて有難う御座います。だんだん一話ごとのページ数が少なくなっています。でもこれくらいの長さの方がストレスが少なくていいですよね。では、また。宜しかったら次話も読んで下さい。

第八話　ギーエン侵攻

季節は春から夏を経て、暑さが増した夏も深まる頃。ロキの一件をからくも乗り切ったエリオットとリューンは少し微妙な立場に立たされていた。あの一件以来、エリオットは狩りに行っていない。城中どころか城下町でもなぜ突然エリオットが狩りに行かなくなったのか不思議に思い、皆色々と噂していた。

「ゴズウッドから来たあの態度のでかい王子のせいではないかな？」

「うむ。あのロキとかいう王子が帰ってからエリオットさまは狩りへ行かなくなった。何かあったのだろう」「ああ、噂で聞いたんだが、どうもエリオットさまはゴズウッドの王子と剣術の仕合をして負けたらしい。それが関係しているのかもな」「しかし、エリオットさまは剣術は元々得意じゃぁない。弓は天下一品だけどな」「いやいや、どうもそれが違うらしい。エリオットさまが狩りで得物を仕留めていたというのはウソで、実際は守護兵のリューンがやっていたっていう話がある」「なんだと！それは本当か！」「ああ、それでエリオットさまはあのロキ王子との狩りの勝負をやらなかったって話だ」

などと、色々と噂話があちこちでされるようになっていた。

この噂は当然エリオットとリューンの耳にも届いていた。

エリオットの部屋でリューンは申し訳無さそうな顔をしていた。自分のせいでエリオットが余り喜べない噂となって人々から話のネタにされている。

「恐らくあのロキ王子が腹いせに城の者達に流したのでしょう。エリオットさま。本当に申し訳ありませんでした」

この件でこの守護兵は何度自分に頭を下げた事だろう。

エリオットは怒りもせず、

「もう良い。過ぎたことだ。人の噂も七十五日。それまで知らん振りしてればいい」

リューンは最近のエリオットの変貌振りに驚いていた。ロキとの一件以来、大人びた対応でリューンに接するのである。それは、エリオットがリューンに対して如何なる事が起ろうとも、決して揺れ動かない信頼を寄せているからなのであった。この男は例え自分のことを犠牲にしてでも、きっとオレにとって為になるように行動するだろう。エリオットは最近常日頃からそう考えるようになっていた。

そんな折、ここアースガルド大陸の北一帯を勢力下に置く北の大国ギーエンから、このホーリーウォールの城に早馬の使者がやってきた。ギーエンは最近隣接する諸諸侯を攻め込んで次々とその勢力に納めて来ていた。ギーエンの国王であるモーフィス・ソグドは一代で今の広大な領土を勝ち得た英知溢れる好傑で、稀代の英雄である。

しかし、そのモーフィスと若き頃から渡り合ってきていたジーヴェルの国王ジークムントはそのモーフィスを毛嫌いしていた。モーフィスは確かに稀に見る有能な王だが、その実は狡猾で残忍。若い時にそのモーフィスの苛烈な性格を見、その野心を知ったジークムントは、今現在このモーフィスこそがこのアースガルドの悪臣であると確信している。

そのモーフィスからの使者の携えた書状は次のような内容であった。

親愛なる友人ジークムント・ハイルどの。この暑き日々をどうお過ごしか。体調など崩してないよう祈るばかりである。さて、貴殿はこの程ゴズウッドと同盟を結んだと耳にしたが、それは何ゆえのことであろう。いや、貴殿はアダル王と手を結び我輩の国に攻め込み我輩を捕らえ天下に逆賊と言わしめて我輩の首を切り落としこのアースガルド全土に晒すつもりであろう。このような策略を見過ごすことは出来ぬ。故にゴズウッドとの同盟を早々に破棄して我輩の国ギーエンと同盟を結ぼう。もしこの申し出を断るのならばこちらの敵と見なして貴国へと攻め込むのもやむなしと思っている。では

良い返事を待っている。どうか懸命な判断をすることを望む。君の古き友人　モーフィスより

と、いう内容であった。

ジークムントは自身の側で仕える従者が読んだその書状の内容を聞いて一笑に伏した。

使者には「貴国との同盟要請には応えられない」と告げ、さっさと追い帰した。

これを受けて2週間後、ギーエン側から大軍が出陣し、ジーヴェル領へと進軍して来るとの情報が忍びの者から伝えられた。その兵士数１０万。目指す方向はジーヴェルの王都ホーリーウォールだが、この城に着くまでは敵軍は一歩手前のジーヴェルの対ギーエン最前線基地であるタートルウォークの城を突破しなければならない。このタートルウォーク城の兵力は８万。ジークムントは迫るギーエン軍より兵士数が少ないことを心配して万全をきす為に、ホーリーウォールの総兵力である１８万の内７万人をタートルウォークに援軍として向かわせた。

このタートルウォーク城は広い湿原のきわに建てられており、この城の周囲はぬかるんだ湿地である。この為人馬の移動に支障が出て非常にゆっくりとしか先に進めない。この事からこの城とこの地にタートルウォーク、つまり亀の歩みという名が付いた。

タートルウォーク城城主であるマクシム・ゲクランは昔からジークムントに使える生え抜きの将で、数々の戦場を戦い抜いてきた歴戦の武人である。歳は５１歳。鍛え抜かれた肉体はいまだ健在で、今でも自分が先頭をきって敵軍に突撃しかねない豪胆なお人である。

それに対して向って来るギーエン軍１０万の総大将はウォーレス・アルフォード。このウォーレスはギーエンの重鎮で、モーフィスの腹心である。歳は４８歳。自らが剣を取って戦う事は余り得意ではないが、常に冷静に状況を把握して作戦を立て迅速に軍を動かす事に長けている。

年齢こそ近いがこの対照的な両雄がここタートルウォークの湿地

帯でついに激突した。
真夏の太陽の焦がすような陽射しがいくさで高ぶる兵達の心をさらに熱くした。

第八話　ギーエン侵攻（後書き）

ついにいくさが始まりました。今回の紹介はジーヴェルの国王ジークムントです。ジークムント・ハイル。４８歳。男。ジーヴェル国の建国者であり、現在の国王。国民の９割が自分が作った宗教の信者であるため、国民には非常に優しく寛容である。いつも温厚で大人物の風体で、実際部下からも慕われている。部下の助言を良く聞き、皆と良く話し合ってから行動を起す。ギーエンの国王であるモーフィスの野心に敵愾心を抱いており、彼を倒す事こそがこのアースガルドの平和に繋がると考えている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2844d/

リューン戦記

2010年10月10日22時50分発行